

## 大きな時代の変わり目の中で

地元浜松で張り子作家として活動している坂田吉章さんに、浜松がもつ魅力の見つけ方や、今の時代との向き合い方について伺いました。



「kac niche collection 2020」で展示した手びねり

東急プラザ銀座「New Local 静岡 物産展」にも出店

### 活動のきっかけ

「浜松の郷土史」に魅せられた事です。もともと京都を拠点に日本の文化を楽しむつづデザイナーとして活動していましたが、ふと「地元の寺社仏閣や工芸品の事知らないな」と思い、自分の郷土史メモとして「天狗ちゃん下界で遊ぶ」というwebメディアを立ち上げました。郷土史を調べた中で「浜松の張り子文化」とも出会い、作ってみたところ夢中に。現在「郷土の歴史を楽しみ、今よりもっと浜松を好きになる物作り」をコンセプトに、張り子作家として活動しています。

### 京都から浜松へ

郷土史への関心から「現地に足を運びたい!」という思いに駆られ2019年9月急遽Uターン。郷土史を通し奥行きを意識する事で、街の顔の変化にも面白みを感じています。もともと海外に行く事も好きでバックパッカーなどもしていましたが、今は浜松からできる暇もないくらいこの土地にワクワクしています。

### 大きな時代の変わり目の中で

2020年1月、張り子作家として初の個展を行いました。それをきっかけに多くの展示が決まり「やるぞ!」というタイミングでのコロナ禍。2020年の展示が全てなくなりました。しかし、作品と向き合う時間が確保でき、活動の核である郷土史に浸れる良い時間を過ごせている一面もあります。また、人を集める展示ではなく場所を彩る展示として「kac niche collection 2020」に出展させて頂けたのも良い経験になりました。せっかくの大きな時代の変わり目なので「良い変革期」にする努力をしていきたいと考えています。

### これから

今後の展望としては近所の子供達がふらっと遊びにこられるような「オープンな張り子の工房」を作りたいです。何か良い物件があれば教えて頂けたら嬉しいです。

#### 坂田吉章 (浜松天狗屋・張り子作家)

静岡県浜松市生まれ。京都精華大学デザイン学部デジタルクリエイションコース卒業。卒業後は京都を拠点とし、日本の文化を研究しながらデザイナーとして活動。2019年、かねて「関心」を寄せていた「浜松の郷土史」と、浜松の民芸品である「張り子」への興味から、浜松へUターン。同年、遠江天狗の「てんぐちゃん」と知り合い、縁起物作りユニット「浜松天狗屋」を結成。オリジナルブランド「浜松天狗張り子」を掲げ、「張り子作家」として全国で活動している。SNS等は「浜松のてんぐちゃん」で検索してください。



## 04 2020年度アーティスト・イン・レジデンスでの制作をふりかえって 自分の仕事を見つめ直す



当館での制作の様子

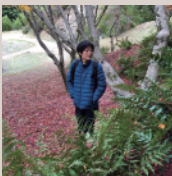
瀬戸内の海

### 一なぜ故郷の浜松で滞在制作をしよう?

この数年間大阪や東京で制作していて、ギャラリーやアートイベントで作品を発表したり他の作家さんと知り合えて刺激はもらえたのですが、一旦自分の仕事を見つめ直すのに鴨江はいい場所と思いました。浜松だと実家のすぐそばに田圃や森があって地面が常に見えるし、帰省したときにその場所を散歩したとき丁度遠州の強風が吹いていて、そんな風景全体が生きている環境の中で素直な制作をしたいと思いました。学生の頃京都の山中を散策したり、フィンランドでも舗装もされない田舎道を延々と歩いたりすることがそのまま制作に繋がっていたので、その感覚を活かしたいと思っていたタイミングでした。

### 一浜松での制作が終わったらすぐに明石市に拠点を移しましたね。

大阪に住んでいたとき、長期的に住んで制作できそうな環境を探し始めました。関西はアート関係の施設もたくさんあるので、郊外であれば住み続けたいと思っていました。今回レジデンスに参加したことで地元でも作家さんやアートに関わる人に新たに出会えたので、ちょっと後ろ髪を引かれました。



#### 吉田実穂 <https://totsu-awaumi.tumblr.com/>

風景と、その中に暮らす私たちとの関係に関心がある。身近な風景は、無意識のうち心身に連続した一部分、また日常の土台になっている。私たち生きるものを取り囲むものもまた、変化する生命そのものではないか。歩いた場所からシンパシーを感じる風景や自然物をキャンバスに切り取り、身体を介して再構築を試みる。人とそれを取り巻く存在の、互いの意識や在り方の交差する視界一三つ目の視界を探している。2020年5〜8月 当館アーティスト・イン・レジデンスで制作。

今「人の移動」がこれまでになく注目されています。これまで大阪、東京、フィンランド、浜松、神戸と拠点を移し制作を続けてきたアーティストの吉田実穂さんにお話を伺いました。

### 一土地を移動することは吉田さんの制作にどんな影響が?

新しい土地に行くことは新たに生きた誰かと出会うような感覚です。その場所の街の作りや自然物の表情などから、人も含めてその場所が総合的に持っている心はどんな性格なのか想像し、その像が積み重なって作品に反映されたりします。旅行でもいろいろな場所に行きますが、作品に借りてくるイメージはほとんどが何度も行った場所です。

### 一明石市でのくらしと今後について教えてください。

家の目の前が海です。瀬戸内の明るい静かな海が浜名湖に似ていて、親近感があります。街の様子もゆったりしていて浜松に似ています。今までシェアハウスに住んで寝室で絵を描いたりしてましたが、鴨江で制作してみて、やはりスタジオの広さや居心地は大事だなどと思ってスペースのある場所を確保しました。次回の展示は6月に東京のグループ展が決定していますが、近隣の神戸市やギャラリーの無い明石市内でも、どこかで作品とばったり出会ってもらえるような展示をしたいと思っています。

## 05 館長からのメッセージ 1年後の世界に思いを馳せて

コロナ禍のなかで、「アートはエッセンシャルワークなのか?」ということも幾度も考えました。そして、思いを馳せたのは1年後の世界です。コロナ禍を乗り越えて新しい価値観の生活様式が定着しているのでしょうか?その時、アートの世界にはどんな変化があるのでしょうか?現代アートは、社会的テーマと向き合い、呼吸し合う事が重要な存在意義だと言われますが、コロナ禍を経験した後ではどんな変化が起こるのでしょうか?「経済とのリンクが不定形なアーティストたちは、こんな時は案外柔軟で、コロナにへこたれていない」との声も聞きますが、コロナ禍のなかで改めて思うのはアートの社会的意義は何なのかという問いです。

様々なアートイベントが中止になるなかで、中国の「アート021 上海コンテンポラリー・アートフェア」が大々的に開催された記事を見て、ロシアとの友好を記念したスターリン様式の歴史的建造物の会場風景が、隣国の出来事なのに何か遠い国の様に思えてなりません。この場所は20年前に始めて訪れた時も上海のシンボリックな建物ではありませんでしたが、当時は高層ビル群が林立する中で取り残された異空間のような印象がありました。しかし、アートフェアの会場となった魅力的な佇まいと、世界中から集まった多彩なアーティストの力強い作品展示から、ポスト・コロナの世界をアートで元気にする活動をそこに感じました。

このニュースで思い出したのは、FLUCTUAT NEC MERGITUR(たゆめども沈まず)という箴言とこれをシンボルとした紋章を市役所壁に掲げる芸術の都バリの不屈の精神でした。30年以上前になりますが、この言葉と紋章が気になってHôtel de Ville de Paris まで実物を確認しに行ったことがあります。「たゆめども沈まず」は「我に大力量あり、風吹かば即ち倒る」と禅思想が説く柔軟さと同義だと考えますが、コロナ禍に煽られる世界共通の心情ではないかと思えます。

鴨江アートセンターは、3年前からヒュッグ・プロジェクトに取り組んでいます。Hygge(ヒュッグ)はデンマーク語で「心地の良い空間」という意味ですが、幸せな国ランキング上位を占める北欧の人々の大切な人生観だと現地で生活して感じました。アートセンターはアーティストとスタッフの共感が交流(emotional interaction)することでヒュッグが生まれると考えますが、その心地良さが館全体に広がり来館者と共有して、館全体を包む雰囲気になることが理想です。ヒュッグは様々な価値観が「共生」する空間であり、「想像力」と「創造性」が生まれる場として、地域のエッセンシャルなアートの拠点になりたいと思います。このプロジェクトは終わりのない挑戦ですが、コロナ禍でも常に現在進行形であることがアートセンターの使命であり、存在意義だとの認識を新たにして活動を続けていきます。

2021年3月 浜松市鴨江アートセンター 館長 村松厚



浜松市鴨江アートセンター

静岡県浜松市中区鴨江町1番地

TEL : 053-458-5360

URL : <https://kamoartcenter.org/>

開館時間 : 9:00 ~ 21:30

休館日 : 12月29日~1月3日/メンテナンス休館日あり

指定管理者 : 浜松創造都市協議会・東海ビル管理グループ

- 01 生活に美術を持ち込むために / いきものだもの
- 02 GOKINJO MAP アーティストが子どもたちにおすすめする場所
- 03 大きな時代の変わり目の中で / 坂田吉章
- 04 自分の仕事を見つめ直す / 吉田実穂
- 05 1年後の世界に思いを馳せて / 館長 村松厚

